

## アメリカ史学会 第59回例会(修士論文報告会)報告

### 第1報告

報告者：阿部希（東京大学・院）

タイトル：第二次世界大戦期のアメリカ合衆国における母親の就労とジェンダー規範—ランハム法下の保育政策を中心に—

コメンテーター：佐藤千登勢（筑波大学）

### 第2報告

報告者：佐藤太亮（一橋大学・院）

タイトル：1918年アメリカ社会とスパニッシュ・インフルエンザパンデミック—ニューヨーク市における感染拡大防止策に着目して—

コメンテーター：平体由美（東洋英和女学院大学）

なお、登壇者の所属はいずれも2024年2月時点のものである。

日時：2024年4月27日（土）14:15-16:45

会場：専修大学 神田キャンパス

### 概要

第59回例会は、例年通り2023年度に提出された修士論文の報告会として実施された。近年オンライン開催が続いていたが、今回は久方振りの対面開催となった。参加者は40名だった。

第1報告で阿部希氏は、第二次世界大戦期のアメリカ合衆国における保育政策に関して、1940年国防住宅法、通称ランハム法の下で実施された保育プログラムに焦点を当て、母親の就労をめぐるいかなるジェンダー規範が存在したのかを検討した。戦時期にランハム法下の保育プログラムが実現したものの、それがなぜ戦後ほどなくして終了したのかという点に注目する阿部氏は、その問いに対して戦前の保育政策との連続性や女性たちが果たした役割を強調し、一方で体制の脆弱性や保育を推進した女性たちの発言に示されるようなジェンダー意識の限界があったと結論づけ、新たな視座を提示した。コメンテーターの佐藤千登勢氏は、阿部氏がそれぞれの課題に対して連邦機関の記録および労働組合の史料を中心とする一次史料に基づいて堅実に検証しており、説得力のある優れた研究であると高く評価した。その上で、連邦レベルだけではなく州や地方での保育プログラムへの取り組みに対する考察、戦時期の保育全体像の中でランハム法下における公的な保育所をどのように位置付けるのか、ひいては民間の保育所の役割、保育における企業内保育所の位置付けにも注意を向ける必要性、一般の女性労働組合員の働きかけへの考察という点を論文の課題

として示した。フロアからは、保育をめぐる歴史における第二次大戦期の評価、保育士という職業が専門職として認知されていたのか、あるいはどのような人が就いていたのか、戦後のバックラッシュと保育政策終了の関係性、労働者のための保育制度にもかかわらずなぜ高額な保育料が設定されたのかという質問が寄せられた。

第2報告で佐藤太亮氏は、1918年のスペイン・インフルエンザについて、先行研究ではそれが第一次世界大戦と結びつきながらいかにして拡大したかということが明らかにされる一方で、「現場」レベルではどのような事象が起こっていたのかという点はあまり考察されていないことを指摘した。その問題意識のもと佐藤氏は、ニューヨーク市に焦点を当て公衆衛生局と民間団体の連携を中心に議論を展開し、さらには都市部における酒場に着眼することで人びとに与えた影響について明らかにしようと試みたと述べた。コメンテーターの平体由美氏は、本研究は疾病史と各国史またはグローバルヒストリーの中間を担ったものとして描かれており、各国史において忘れ去られているスペイン・インフルエンザを第一次世界大戦の文脈の中に位置付け、社会が疾病と戦争にどのように対応しようとしたかを明らかにしようとしたものである点を評価した。さらに記録に残りづらい一般市民による対応の考察に取り組んだ点、政府と市民の中間団体として民間団体を前景に取り上げたことで多角的に当時の状況を描いた視点に独自性があると評価した。その上で当時の錯綜した状況のもとでは「上」と「下」という権力構造の定義に関して慎重に検討すべきだということ、加えて一般人の反応として酒場の機能を取り上げるのは男性中心で限定的であるという問題を提起した。さらに平体氏は、疾病史研究では全般的にその病気が社会構造を大きく変えたものとして語られる傾向があることを指摘し、疾病史と各国史の中間に位置付けられる本研究は、より広い視点と結びつくことで発展の可能性が開かれていると評価した。フロアからは、ニューヨークにおける人種とパンデミックをめぐる議論、「スペイン・インフルエンザ」という呼称の定義についての質問などが寄せられた。

報告終了後は会場付近にて懇親会が行われ、多くの参加者を得た。特に大学院生の参加が顕著であり、会場のあちこちで活発な議論が行われ盛況を呈した。普段の所属を超えた交流は、今後の研究を活性化させる展望をもたらし、第59回例会は盛会裏に終わった。

文責 宮城春香（専修大学大学院）